

図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2012. 3. 9

主な内容

頁

『人生行路のナビゲーター』（寄稿）	幹 事 田 中 敏 明	・ ・ (425)
教官著書の紹介	国防論教育室 道 本 光一郎	・ ・ (429)
教官共著の紹介	応用化学科 浅 野 敦 志	・ ・ (431)
寄贈図書	の紹介	・ ・ ・ ・ ・ (433)
展示コーナー『絵巻物に見る平安時代の日本』		・ ・ ・ ・ ・ (435)

『人生行路のナビゲーター』

幹 事

田 中 敏 明

『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』、また『天は自ら助くる者を助く』という文言を承知の方は多いことと思う。それでは、それぞれの文言で始まる本を読んだことがあるかと問えば、どうであろうか。前者は、福沢諭吉著の『学問のすゝめ』で、後者は、サミュエル・スマイルズ著の『自助論』である。恥ずかしながら私がこれらの本を読んだのは、ごく最近のことである。人との出会いと同様に、本との出会いも、一つの出会いが新たな出会いを生むようである。一昨年（2011）年の正月、本屋さんで何気なく手にした『自助論』が、『学問のすゝめ』を読むきっかけとなった。『自助論』の解説に、明治の青年に同書と並

んでよく読まれた本として、『学問のすゝめ』が紹介されていたのである。

サミュエル・スマイルズの『自助論』の原題は、**Self-Help, with Illustrations of Character and Conduct**で、1859年にイギリスで出版され、日本では中村正直によって日本語に翻訳され、『西国立志編』（以後、『自助論』という。）として明治3（1870）年に出版された。この本は、日本で英語の書物が一冊まるごと訳された最初のものであるとのことである。そして、その2年後の明治5（1872）年に、福沢諭吉の『学問のすゝめ』の初編が発刊されている。このように相前後して出版されたこれらの本は、『自助論』が

100万部ほど、『学問のすゝめ』に至っては、17編合わせて300万部以上売れたと言われている。当時の人口が3,500万人～4,000万人であったことを考えると驚異的な数字であり、いかにこの2つの本が明治の人々に支持され愛読されたかが分かる。

では何故、このように多くの人々にこれらの本が支持されたのだろうか。まず、その時代背景から考察してみることにする。

当時の日本は明治維新後で、国内的には、士農工商等の封建的な価値観が打破され、誰もが努力次第で自らの道を切り開くことが可能となった。また対外的には、黒船来航に目覚め、国を開き、欧米列強がひしめく荒波に船出した日本が、自らの手で国造りをして、欧米列強に伍する実力を涵養しなければ、国の独立も危ういという危機感があったものと思われる。福沢諭吉の『学問のすゝめ』を貫くのは、独立自尊の精神であり、スマイルズ著の『自助論』の自助の精神と同様に、人や他国に頼ることなく自らの力で、自らの道を切り開いていくという観点で共通するものがある。このような考え方・精神が、先に述べたような時代認識を持つ明治の人々の共感を得たものと考えられる。

また、『自助論』が日本語で出版された翌年の明治4(1871)年には、江戸時代に締結された不平等条約の改定と、新生日本の国の在り方を欧米諸国に学ぶことなどを目的に、岩倉具視を団長とする総勢約100名からなる使節団が欧米に派遣された。使節団の顔ぶれを見みると、大久保利通や伊藤博文等、日本の近代国家建設で中心的役割を担った多くの人材が含まれている。このように、明治新政府が近代国家建設の範を欧米諸国に求める動きを見せる中で、国民の欧米に対する関心が高くなったことは容易に想像できる。このような状況において、欧米経験豊富な福沢諭吉が

自ら書いた『学問のすゝめ』は当然のこととして、『自助論』は、当時隆盛を極めていたイギリスからもたらされたものであり、使節団員が携行したとも言われていることから、これからの日本の手本として、それぞれ注目を集めたものと考えられる。ちなみに、『自助論』を翻訳した中村正直は、幕末の1866年から68年にかけてイギリスに留学している。また福沢諭吉は、1860年にアメリカ、1862年にはヨーロッパ、更に1867年には再びアメリカへと何度も欧米に行っている。

『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志編』』の著者である平川祐弘もその著書の中で、明治維新をJapan's turn to the Westと文化史的に定義し、日本が漢字文明圏に背をむけて西洋文明圏に目を転じて文化史上の方向転換をする立役者となったのが、福沢諭吉と中村正直であると指摘している。

以上見てきたように、『学問のすゝめ』と『自助論』は、明治の人達に感化を与え、精神的支柱として活力にあふれる明治時代を支えたのである。

それでは、明治時代の人達を魅了し感化を及ぼしたこれらの本はどのようなものなのか、それぞれの本の内容について、分かりやすくするために現代語訳版をもって簡単に紹介する。

まず、スマイルズの『自助論』である。『自助論』が書かれた頃のイギリスは、「ユニオンジャックの翻るところに太陽が没することはない」と言われたほど隆盛を極め、世界最強の国であった。その隆盛を支えたのは、まさしく自助の精神であるとして、『自助論』の中でも、「自助の精神は、エネルギーに活動する人間に見られる特徴だが、それはまた常にわれわれイギリス全体のすぐれた国民性でもあった。自助の精神がその国民全体の特質となっているかどうか、一国の力を見ると

きの正しい尺度となる。」と述べている。



このようにまず、自助の精神の重要性を述べるとともに、『自助論』では、多くの人の具体的な成功事例を挙げて、成功に導いた要因を教訓として紹介している。そういう意味では、『自助論』は人生の指南書とも言えよう。ここで、私の心に残った言葉をいくつか紹介したい。

- 逆境の中にこそ若芽は強く伸びる
- 成長は「無知の知」から始まる
- 向上心に燃えた者にはカベはない
- 優柔不断が身の破滅を招く
 - ・誘惑が訪れるのは、若者の力を試すためだ。
 - ・人生の若い時期に得た習慣は、悪に対する真の防波堤になる。なぜなら、人間が品行方正になるのは習慣を通じてであり、モラルが損なわれないよう守ってくれるのもまた習慣の力なのだ。
- 下ばかり見ているは大志は抱けない
 - ・実践的な知恵は、自己修養と克己心を通じてのみ得られる。この両者の根底には自尊心が横たわっている。希望も自尊心から生まれる。希望は力の伴侶であり成功の母だ。

・ 慎み深く正しい自尊心は、立派で有意義な業績を生む土壌であり源泉である。

- よき師、よき友人は人生最大の宝
- 快活さは人間の精神に弾力性を与える

以上、防大生の参考になると思われる言葉や文章を紹介したが、枚挙すれば切りがないのでこの辺で紹介を終える。



次に『学問のすすめ』だが、最初から17編という構想のもとに書かれたものではなかった。その辺の経緯は、初編の端書と第2編にあり、最初は、福沢諭吉の故郷の中津市学校の発足に伴い、学問の目的を記して同郷の旧友に示すために書いたものだった。それを見た人が、広く一般の人にも提供してはと勧めたことから、小冊子にして公にしたものである。そうしたところ、意外に多くの読者を得たことから、2編、3編と書き継いで17編に及んだ。『学問のすすめ』は、2編端書にもあるように、単なる学問の指南書ではなく、一個人と国家の関係、国家の在り方や人望論まで、一般の人の心得となるべき多くの事項をとりあげて、学問の大目的として示したものであり、『自助論』と同様、人生の指南書とも言えるものである。ここでまた、私の心に響いた言葉又は文章を紹介する。

- 天は富貴を人に与えずしてこれをその人

の働きに与うるものなり（初編）

●学問をするには分限（身のほど）を知ることが大事だ（初編）

- ・人は生まれつき、・・・自由自在である。
だが、ただ自由だけを唱えて分限を知らなければ、わがままになり、身を持ち崩すことが多い。
- ・分限というものは、天の道理にもとづき、人の情を大事にして、他人の妨げとならずに自分自身の自由を実現することである。
- ・自由独立という問題は、個人だけでなく、一国の上にもあることだ。
- ・(外国との交流に当たっては) 天理と人道に従って互いに交流し、・・・国が恥辱を受けたときは日本国中の人々が一人残らず命を捨てても国家の威光を守ることこそ、一国の自由独立というべきものである。

●文明の精神とは、国民の「独立の気力」である（第5編）

- ・政府の力と民間の力が釣り合って、国全体の力を増し、現在の弱々しい独立を、ゆるぎない基礎の上に置き、外国と競争して一步も譲ることのない状態にしよう。

●学問をするには志を高く持たなければならない（第10編）

- ・人は単に一身一家の衣食を得ることで満足してはならない。人の天性には、これよりも高い約束があるものだから、人間の交際の仲間に入り、その仲間という立場でもって世のために努力するところがなくてはならない。

●学問で重要なのは、選択の知恵を明らかにすること（第15編）

- ・物事を軽々しく信じてはならないならば、軽々しく疑ってはいけない。信じ

るか疑うかについて、取捨選択する力がなくてはならない。

- ・数多くの書物を読み、数多くの事物に接し、素直で落ち着いた心で道理を見通し、真実を求めるなら、たちまち信疑は場所をかえ、昨日信じていたことが今日は疑問となり、今日の疑問は明日には氷解することもある。学ぶ者は努力しなければならないのだ。

●人望は知識と人格にともなう（第17編）

- ・人望は、もちろん腕力によって得られるものではない。また、財産が多いだけで得られるものでもなく、ただその人の活発な才知の働きと正直な本心の徳とによって、しだいに積み上げて得られるものなのである。
- ・顔つきが生き生きして愉快なことは人としての義務の一つで、人と交際する上で最も大切なものである。人の顔つきは、ちょうど家の玄関のようなものだ。

以上長々と『自助論』と『学問のすゝめ』について紹介してきたが、時代は異なるものの、現代にも通用することが多く含まれているものと思料する。悔やんでも仕方がないことではあるが、もっと早く、これらの本に出会っていただと思っている次第である。従って、これからこの防大で学を修め人間を磨き、卒業後に自衛官としての人生行路を歩んでいく学生諸官に、そのナビゲーターとしてこれらの本を読み活用することを勧めたい。

【参考図書】

『学問のすゝめ』福沢諭吉 土橋俊一校訂、校注 講談社文庫（図書館所蔵）

『学問のすすめ』福沢諭吉

加賀義=現代語訳

幸福の科学出版株式会社

『自助論』 サミュエル・スマイルズ
竹内均訳 三笠書房 (図書館所蔵)

『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と
「西国立志編」』 平川祐弘
名古屋大学出版会 (図書館所蔵)

~~~~~教官著書の紹介~~~~~

『冬季雷の科学 (とうきらいのかかく)』



国防論教育室 教授 (1等空佐)

道本光一郎 (コロナ社 2012)

本書は、平成24年1月20日に改訂第3刷が発行されました。初版の発行は今から14年前の平成10年の年末で、二十世紀末の出版でした。その後、平成16年の第2刷の発行を経て、今回改訂3刷を出すことができました。二十一世紀も早十年以上が経過し、世の中はいろいろの想定外の事態が生起している中での出版となりました。

本書のあとがきにおいて私は次のように結びました。“地球温暖化や気候変動などの地球環境問題がますます大きくクローズアップされるようになり、想定外と呼ばれるような自然災害も世界中で多発しています。このような中、我が国においても本年(平成23年)

3月11日に東日本大震災が発生し、併せて私の故郷である福島において原子力発電所の事故が地震・津波災害に引き続き生起してしまいました。本書は、「地震、雷、火事、親父」

という怖い物を表す諺のうちの雷について、特に冬の雷についての研究成果等を述べましたが、まだまだ研究を継続しなければならないことがたくさんあります。これからも夢は大きく「ノーベル賞」を目指して頑張っていくつもりです。(平成23年11月30日)”

本科学生諸君や研究科学生諸氏がこの本を読み、「自然界の謎解きのヒント」として使用していただければと思っています。まえがきには、“気象学的な観点から、十年以上にわたって北陸地方の冬季雷を研究し、(中略)研究の直接の動機は、十数年前(当時から)の石川県小松飛行場において気象予報に携わっているとき、パイロットの方々から、「どんなときに雷が起こるの?」、「あの雲の中に入ると被雷するの?」、「雲にどこまで近づくと危険で、どこまでなら安全なの?」という質問がなされ、それに対して適切に解答できなかったことに端を発しています。”と記述しています。

私は、理工学研究科学生として2年間、その後、地球科学科(当時)研究員として5年

半、冬の小松基地周辺での冬季雷観測を実施し、解析結果を論文として学会発表し、それをさらに博士論文としてまとめて、平成5年10月、東京理科大学物理学科から博士(理学)の学位を取得しました。当時は現在と異なり、学士、修士、博士を本学で取得することはできない時代でした。今では、研究科前期・後期課程ができ、本科学生には学士号が、研究科学生にはそれぞれ修士号・博士号が、それぞれ大学評価・学位授与機構への申請・審査を経て合格したものに授与されるようになりました。私のように、研究科から始めて、十年近くを費やして博士の学位を取得するというような、多くの労力と時間を掛ける必要がなくなったのです。前期課程2年、後期課程3年、トータル5年程度で博士を輩出することが可能となりました。どうか若い学生諸君は、よく勉強し、将来の防衛省・自衛隊の中核となる人材としての期待に応えていただきたいと思います。

まえがきのむすびで、“本書において著者は、十数年の冬季雷の研究の足跡を皆さんにお伝えし、一人でも多くの若者が二十一世紀に向けて、優れた研究者となり、自然現象の未知な分野の解明にどんどん挑戦していただきたいと思って執筆しました。「こんな研究もあるんだな」、「こんな要素の組み合わせでなにかがひらめくんだな」というような気楽な気持ちで読んでいただき、本格的な自然科学の研究者としての始まりの動機づけになれば幸いです。”と記述しました。この本は、本校の図書館にも収蔵されていますし、価格もそれほど高価ではありませんので、是非気軽に手にとって読んでいただきたいと思います。

この本以外の私の気象関係の著書は、以前の図書館だよりで紹介していただいた「気象予報入門」があります。気象予報士に挑戦し

たいと思っている学生諸君の入門書として最適だと思います。また、「一億人の気象学入門」という本も十数年前に刊行されましたが、その後絶版となってしまい、近々電子書籍として復活させる準備をしています。この本も気象予報士や防災士などの国家資格に挑戦しようという方々には有用と思います。

なお、分担執筆した「気象予報士ハンドブック」や「身近な気象の事典」は、気象予報士試験対策等の際に大変重宝するものと思いますので、是非、この機会に紹介させてください。ただし、どちらも少々高価な事典類ですので、皆さんは図書館で閲覧するなどして知識を増やしてください。

現在、私は、防衛学教育学群の国防論教育室に在籍しています。本科2学年に「国防論I」を、そして4学年に「防衛学特論(国防と気象)」をそれぞれ講義しています。特論はゼミ形式での論文・レポート提出ですが、2学年についても座学を通じて自分たちで考え、疑問を持ち、それを解決していくために勉強する、ということを教えています。高等学校までの授業と大学での講義の違いは、単に授業等を聞くだけでなく、自分で考えて疑問な所を勉強して理解し、新しい知識を身につけていくということではないでしょうか。教官に何かを教えてもらおうという受け身の姿勢ではなく、何かを盗み取ってやるぞ、というくらいの積極性が日々の生活に必要なのではないのでしょうか。これは勉学だけではなく、学生舎生活や校友会活動等、あらゆるものに適用できるのではないのでしょうか？

若いということは素晴らしいことです。これから何十年という時間が、勉学等に費やしていくことができるのです。我々のような年配教官にはもはや過去に戻ることは不可能です。皆さんは是非この何十年という可能性のある「将来」、そして「遙かな未来」に向けて、

挑戦していただきたいと思います。そのときに、ここで紹介した拙著が何かのきっかけになれば幸いです。

(引用文献)

「一億人の気象学入門」、道本光一郎  
三天書房（2000）

「気象予報入門」、道本光一郎  
コロナ社（2005）

「気象予報士ハンドブック」、道本光一郎他  
日本気象予報士会編、  
オーム社（2008）

「身近な気象の事典」、道本光一郎他  
日本気象予報士会編、  
東京堂出版（2011）

~~~~~教官共著の紹介~~~~~

『朝倉哲郎 編著 「広がるNMRの世界 40人の研究者からの
熱いメッセージ」』



この本は、核磁気共鳴（Nuclear Magnetic Resonance：NMR）現象を解説し、原理を紐解く教科書ではありません。単なる分析装置であるNMRが、分析装置の王様として君臨し、今や世界中のほとんどの大学や研究所に少なくとも複数台設置され、さまざまな分野で広範囲に利用されています。NMRがどんな分野に利用されているのか、専門家でもすぐには答えられません。本書は、その利用方法について網羅し解説した本です。なぜこのような本を出版しようと思ったのか、NMRの歴史を紐解きながら述べていくことにします。

NMRは、強力な磁石の中におかれた分子

応用化学科 准教授

浅野敦志（コロナ社 2011）

の原子核が磁石の強さに依存したエネルギーを吸収する物理現象を指します。この現象が発見されたのは第二次世界大戦が終了した1945年末です。戦争が終了してすぐに発見されたNMR現象は、戦時中の技術がその発見に大きく寄与しています。敗戦により日本からアメリカに渡った電波技術もNMR現象発見に大きく影響を与えました。NMR信号とは、電磁波（当時はラジオと同程度の周波数だったので今でもラジオ波と言う）を用いて原子核の共鳴を引き起こし、そこから発生するラジオ波共鳴信号のことを言います。当時、オシロスコープを用いて観測された、単純な1本のNMR共鳴信号から、NMR法が今日の化学・生化学の分野で大きく発展し、無くてはならない分析装置となることを予見した科学者はいなかったでしょう。この発見により、1952年、アメリカのBloch（ブロッホ）

と Purcell (パーセル) にノーベル物理学賞が授与されました。

物理現象であるNMR現象に化学者が狂喜したのは、分子結合が信号から読み取れることがわかってからです。NMR現象の発見からすぐに、 $\text{CH}_3\text{CH}_2\text{OH}$ という単純な分子が、3種類の水素原子から成り立っていることを直接証明するNMRスペクトルが観測されました。さらに、その比率が3:2:1となることもNMR信号から証明されたことにより、物理の世界から化学の世界へとNMRは展開することになりました。その後、NMRはフーリエ変換法 (FT法) を用いた観測手法の改良を経て、生物の世界にも進展し、最近では病院などでも欠かせないMRI装置に発展しました。NMR現象の発見から40年以上経て、1991年にFT-NMR法の開発でErnst (エルンスト) にノーベル化学賞が、また2001年にNMR法によるタンパク質の構造解析でWüthrich (ビュートリッヒ) にノーベル化学賞、2003年にはMansfield (マンスフィールド) とLauterbur (ロータバー) に、MRI法の開発によりノーベル生理学賞が授与されています。

NMR (MRIも含める) 法は、化学・生化学の分野では無くてはならない装置です。有機化学では、合成がきちんと成功しているか途中経過の確認や、最終合成物の確認に必要不可欠です。また天然化合物の構造解析、合成高分子の構造と物性、医療、医薬品の構造確認等、NMRが活躍している分野は多種多様です。NMRには、測定方法が多種多様に存在するという、他の分析装置とは全く異なる特徴があります。現在においても測定方法の改良や新規測定法の開発、装置の革新が行われています。そのため、目的の情報を得るために、どんな測定をすればいいのかわかりにくいと言われることもあります。また、

NMRと一言で言っても、測定対象物が溶液なのか固体なのか、はたまた生体なのかによって測定法や装置まで異なります。したがって、他の分析装置が、ある程度決まった物を対象とし、測定法も限られているのに対し、NMRでは実験方法を選択する必要があります。NMRの測定法全てに精通することは不可能なのです。また、NMR信号を解析する手段も多種多様で、今でも改良が進められています。他の分析装置が完了形として存在しているのに対して、NMRは未だに発展途上の分析装置と言えます。

ここで紹介する「広がるNMRの世界」は、あらゆる分野の専門家が、NMRで何がわかるのか、NMRを用いて得られた情報をどのようにして解析したのかを解説した本です。これからNMRを用いて研究を進めようと考えている大学4年生、大学院生、若手研究者を主な対象者として、NMRとは何なのか、何がわかるのかという視点から説明している唯一無二の本です。NMR法の原理を教えてくださいの本はある程度存在していますが、NMRで何ができるのかを広範囲な分野にわたって教えてくれる本は存在していませんでした。そこで、東京農工大学の朝倉哲郎教授が中心となり、NMRを用いて何がわかるのかという視点に立った本を出版しようという機運が盛り上がりました。朝倉先生を編集委員長として編集委員が組織され、この特色ある本書の出版計画がスタートしました。私が編集委員および著者として本書に携わった箇所は、(1) 執筆者の選定と目次・分野の作成/編集、(2) 本書第1項目の執筆、(3) 参考図書のおすすめとその内容の執筆、(4) 注釈の内容構成と執筆、(5) 表紙の図作成と、多岐にわたっています。

本書は、合成高分子・先端材料/生体分子/医療・医薬/分析・NMRの進歩、の4部

構成となっています。それぞれの項目に執筆者が考えるキーとなる画像が必ず入っており、イメージしやすくなっています。高分子・先端材料分野では、ポリオレフィン類やポリマーブレンドの微細構造・物性の解析について、固体や溶液NMR法を用いた研究が7件解説されています。また、有機EL材料、燃料電池に必須な無機材料の固体NMR解析や、電池中のイオン輸送について磁場勾配NMR法による研究などが3件解説されています。生体分子分野では、DNA結合タンパク、生体膜、ハチ毒、絹タンパク、ビタミン、ミオグロビン、キチンなどの構造や相互作用情報の解析について11件の報告を網羅しています。

医療・医薬の分野では、アルツハイマー病の原因物質アミロイドの構造とその変化、相互作用、コラーゲン結合に関係しているタンパク質、HIVに関係しているタンパク質の構造や相互作用、いろいろな毒、インドメタ

シンなどの医薬品の結晶多系解析、血液適性に関するポリマー活性に関する研究、脳のMRI、カイク体内代謝のNMRなど、非常に多様な対象物をさまざまなNMRの手法を駆使して研究した結果が10件報告されています。分析・NMRの進歩の項では、最先端のNMR測定手法について11件解説しています。液体クロマトグラフ法や多変量解析を組み合わせたNMR法、時間短縮測定法、超高感度、超高磁場、超微量超高速固体NMR法といった、最新のトピックを網羅しています。

本書は、単なる分析装置であるNMRが、なぜ分析装置の王様として君臨し続けているのか、40名の研究者による多様な分野での利用方法が解説された構成となっています。若手研究者が、NMRの可能性と面白さを、本書を通して認識し、NMRのディープな世界にいざなう足がかりとならんことを、著者・編者を代表して願っています。

～本科55期防衛大学校静岡県父兄会による寄贈図書を紹介～

このたび、48冊の図書が寄贈されました。

勉学の役に立ちたいという、本科55期防衛大学校静岡県父兄会の方々の気持ちを大切に、本科・研究科の学生をはじめ教職員の皆様にも御活用いただけることを切に願います。

| No. | 書名 | No. | 書名 |
|-----|--------------------------------------|-----|-------------------------|
| 1 | 武器輸出三原則 | 6 | OpenCV で始める簡単動画プログラミング |
| 2 | 詳解 OpenCV：コンピュータビジョンライブラリを使った画像処理・認識 | 7 | 日本のテロル：変質するバイオレンス130年史 |
| 3 | 並行コンピューティング技法：実践マルチコア | 8 | 革新的な多孔質材料—空間をもつ機能性物質の創成 |
| 4 | アルゴリズムクイックリファレンス | 9 | 日本と国際連合 新装版 |
| 5 | OpenCL 入門：マルチコア CPU・GPUのための並列プログラミング | 10 | 国際機構法の研究 |

| No. | 書名 | No. | 書名 |
|-----|---|-----|-------------------------------|
| 11 | C言語で学ぶ実践画像処理 | 30 | テロとインテリジェンス—覇権国家アメリカのジレンマ |
| 12 | 新しい局面を迎えた界面の分子科学—機能デザインと計測技術の展開 | 31 | 国境を越える政策実験・EU |
| 13 | ソ連・ロシアの核戦略形成 | 32 | スハルト体制のインドネシア—個人支配の変容と一九九八年政変 |
| 14 | 実践OpenCV—映像処理&解析 | 33 | 中国政治外交の転換点—改革開放と「独立自主の対外政策」 |
| 15 | 韓国外交政策の理想と現実：李承晩外交と米国の対韓政策に対する反省 | 34 | X線散乱と放射光科学 基礎編 |
| 16 | 情報理論入門：基礎から確率モデルまで | 35 | 明治期民事裁判の近代化 |
| 17 | 情報理論入門—「情報量」「エントロピー」から「符号」「暗号」まで | 36 | 放射光科学入門 |
| 18 | ビギナーズガイド 情報理論 | 37 | 隠された大震災—太平洋戦争史秘録 |
| 19 | マルチメディア情報理論入門 | 38 | はじめての物理数学 |
| 20 | 情報理論 | 39 | 原子炉物理実験 |
| 21 | ワークアウト国際人権法—“人権”を理解するために | 40 | 紛争後社会と向き合う—南アフリカ真実和解委員会 |
| 22 | Essential OpenCV Programming : with Visual C++ 2008 | 41 | “民主政治”の自由と秩序—マレーシア政治体制論の再構築 |
| 23 | 驚異のソフトマテリアル—最新の機能性ゲル研究 | 42 | 日本の国境 — いかにかこの「呪縛」を解くか |
| 24 | 不活性結合・不活性分子の活性化—革新的な分子変換反応の開拓 | 43 | 冷戦後日本の防衛政策—日米同盟深化の起源 |
| 25 | 核酸化学のニュートレンド—DNA・RNAの新たな可能性を拓く | 44 | 世界経済の歴史—グローバル経済史入門 |
| 26 | 本当の戦車の戦い方—陸上自衛隊の最前線を描く | 45 | アジア法ガイドブック |
| 27 | 組織は合理的に失敗する—日本陸軍に学ぶ不条理のメカニズム | 46 | 人類の歴史を変えた発明1001 |
| 28 | ラテンアメリカ出会いのかたち | 47 | ケンブリッジ世界宗教百科 ヴィジュアル版 |
| 29 | ナショナル・アイデンティティの国際比較 | 48 | 沖縄戦と民間人収容所 失われる記憶のルポルタージュ |

展示コーナーの紹介

「絵巻物に見る平安時代の日本」

総合情報図書館では、日本の代表的な絵巻物など古典の複製品を所蔵しています。今回はそのうち、「源氏物語絵巻」、「鳥獣戯画」及び「信貴山縁起絵巻」の3点を展示しました。これらはいずれも原本は平安時

代に作製されたものであり、古い時代の日本を知ることのできる貴重な資料です。

これらをご覧いただき、日本文化の古典に接するとともに、遠く平安時代の世界に思いをはせていただければ幸いです。

[源氏物語絵巻]



[鳥獣戯画] [信貴山縁起絵巻]



編集後記

今号では、宮下前幹事に代わって着任された田中新幹事のご寄稿、そして道本教官および浅野教官の著書紹介の記事をいただきました。誠にありがとうございます。

防衛大学校にはいくつもの顔があります。その代表的なものとしては、学生に士官候補生としての教養や専門的な研究方法を教える教育機関としての顔、幹部自衛官に必要な行動力や判断力、体力、集団行動、服務規範、戦術や戦略などを身につける訓練機関としての顔、そして教官や研究科学生が関わる研究機関としての顔であろうと思われます。そして、図書館はそのいずれの顔にも関わる存在なのです。

田中幹事のご寄稿は、『学問のすすめ』や『自助論』といった有名な書物をひいてのものですが、おそらく書名は知っているが中身を熟読したことはない、という方々がほとんどなのではないでしょうか。いずれも明治維新の時期に日本人に大きな影響を与えたものですが、その力は今なお衰えていないと思われます。今号をお読みになったのを機に手にとってみてはいかがでしょうか。

また、お二人の教官の著書は、それぞれの専門における優れた研究成果を元に執筆されたものです。防衛大学校は、学生数二千人ほど、教官数もおよそ三百と決して大きくはありません。しかし、その教官の専門は多岐にわたり、またその研究で扱われる課題や内容も非常に重要かつ高いレベルのもので、その成果は学生たちに授業として還元され、さらにはさまざまな自衛隊の活動を支えるものともなっています。前号でご紹介した震災における宮下前幹事、そして防災を専門とする教官のご寄稿にもそれが表れています。

教育、訓練、研究に寄与する図書館の役割

を再認識した次第です。お一人でも多くの方に足を運んでいただきたいと思います。

編集委員 木下哲生

NADAL Bulletin Vol. 26, No. 2

防衛大学校図書館だより 2012. 3. 9

発行及び発行人

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校総合情報図書館 Tel. 046-841-3810

館長 鎌田伸一

編集委員

木下哲生 (人間文化学科)

平津圭一郎 (応用化学科)

吉野順也 (戦略教育室)

編集庶務

内藤明生 (総合情報図書館事務室)

連絡先

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校 総合情報図書館事務室

「図書館だより」事務局

Tel. 046-841-3810 FAX. 046-843-3818